

「お墓参り」 高2 H. H.

8月11日、私は母と喧嘩をした。

どうしても、母の言い分が理解できなかったからである。

8月も中旬に入り、お盆のこの頃は毎年お墓参りをするため、帰省をする。

しかし、今年は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、都会から地方への帰省の自粛を連日どのメディアも報道していた。世間も自粛ムードで、私もいつの間にか外出することさえ、億劫になっていた。

そのような状況で、突然母が「お墓参りに行こう。」と言い出したのである。

私は啞然とし、すかさず反論したが、母は「ただお墓参りをするだけだ」という一点張りであった。私は故郷を大切に思うなら、行くべきではないと思っていた。

ますます母への不満が募っていく最中、ふと仏壇の写真を見た。

そこには、母と祖母が仲睦まじく写っていた。私には決して出すことのできない、子どもの顔をした母に涙が出てきた。私にとって祖母は古い記憶の片隅でしかなく、お墓参りも慣習の一つでしかなかったが、母にとっては大切な親であり、お墓参りにそが唯一会える機会だったのである。

私は自粛をすることが何よりも大切だと思っていたが、その考えが母の大切な機会を奪っていたのである。また、日々家族と共に過ごしていることへの有り難みを痛感した。

そして、二ヶ月後。お墓参りをしに行った。

よく晴れた空の下、母は「ただいま。」と言って、静かに合掌していた。

「手が繋ぐ」 高1 A. K.

手を添えて、相手の片手の中にレシートとお釣りがきちんと収まるように渡す。そこには、当たり前すぎて今まで気付いていなかった心遣いと丁寧さがあった。

新型コロナウイルスの感染拡大から、お釣りの受け渡しを一度、受け皿を通して渡す店が増えた。平らな場所に置かれた小銭を取ることは意外と難しく、後ろに並ぶ人のことを考えると余計に焦ってしまう。

そのうち、無人レジが導入されて、あの手の温もりを感じる機会すら減っていくのだろうか。底のない寂しさとアナログの温かさを失う怖さを覚える。

オンラインが主流になったとき、人は一体、人の代わりに何と繋がるのだろうか。手を触る。人前でマスクを外す。空の下を歩き、人に会いに行く。そのように人と繋がるのが怖くなり、避けるための手段としてオンラインの普及が進む。リアルありきのオンラインがそうではなくなる。そう遠くない現実に危機感を募らせた。

本を買った時、お釣りをいかに早く拾えるかを考えて財布を開けていた。キリよく払えなかったことを悔やんだ。

しかし、降ってきたのは柔らかな声。

ブックカバー、お付けしましょうか。

店員さんの手際の良さ。本を大事に扱う手。ぴったりと合わせて折られたブックカバー。その紙の質感を自分の掌で確かめる。

ご利用ありがとうございました。その言葉に知らないうちに微笑んでいた。手と手が繋いでいく、私の失いたくない光景はまだそこにある。

「基礎疾患と云ふもの」 中1 T. S.

世界では新型コロナウイルスのせいで、全てにおいて我慢の生活が続く。だけど、そんな状況下でも外出して感染する人が沢山いる。私の家は昨年からあまり外出をしていない。というのも、私の妹が基礎疾患を持っているからだ。基礎疾患を持つ人が感染すると重篤化する可能性がとても高くなる。もし、妹が感染したらきっと死んでしまう。

中学生になって友達と沢山遊ぶのが楽しみだったが、妹の事を考えると、私も遊びたい気持ちより、うつるわけにはいかないという気持ちの方が勝つ。この前クラスメイトに、初めて遊びに誘ってもらえた時は嬉しかった。でも、舞い上がりそうになった気持ちを押し殺して断った。

“自分は絶対に感染しない”や“感染しても死ぬわけがない”という利己的な考えで外出する人もいると思う。私はそういう人達に「あなた達の家族に基礎疾患を持つ人や高齢の方はいますか？」と訊いてみたい。きっとこれを訊く事で外出したいという思いを考え直してくれる人がいるはずだ。

今は、日本中いや、世界中の人達が我慢と自粛を強いられている時代だ。私は、今まで人間が我慢と言うものをあまりして来なかった罰として、コロナが流行ったのだと思う。そして私達は、この罰を甘んじて受け入れるべきなのかもしれない。私は、こういう風に考えると、自分の我慢もそこまで「苦」じゃ無い。収束した暁には誘ってくれた子を私から誘いたい。

「人を想う」 高2 I.C.

私がコロナによる自粛期間に思い知ったのは「会いたい人には会ったほうがよい。」ということだ。誇張でも何でもなく、無理してでも会ったほうがいい。なぜなら、直接話したくても突然会えなくなったり、普通の日のさよならが案外最後の別れとなったりするからだ。

私は自粛期間になって友人と会わなくなった。貿易会社に勤めるひとり暮らしの兄とも会えなくなった。勿論、連絡は取る。偶に電話だってする。それでも電話越しの機械音は彼らの声ではないし、僅かな機微は会ってでしか分からない。段々と連絡の頻度は減り、友人の細かい仕草や口癖を徐々に忘れ、ニュースや配信授業に追われる日常が当たり前となった。

一ヶ月会わなければ一ヶ月会わないことに慣れる。四ヶ月会わなければ四ヶ月会わないことに慣れる。それは余りに寂しい事だ。けれど私達は其れを経験した。

会いたいと思ってる内は会えない。待っていても連絡は来ない。それでも、連絡を待ってしまうのなら自分から送るべきだ。会いたいなら「会おう。」と言ってみるのがいい。それで会えたら万歳。会えなくても気持ちが伝わったなら上々だろう。

命を守る事はとても大切なことだ。しかし顔を見合わせて話すことも同じくらい不可欠だと思う。暗いニュースが増えた。街から人が消え、行きたかった店も潰れた。それでも明日も頑張っていくしかない。だから私は大事な人たちに明日も会いたいと伝えたいと思う。

「精一杯」 高2 N. M.

コロナウイルスの流行によりさまざまなイベントが中止され、2020年を「良い一年だった」と言えるくらい充実した日々を送れた人はおそらく殆どいないだろう。私自身も充実した日々を送れなかったと感じている一人で、「コロナのせいで〇〇ができなかった」とこの一年かなり口にしていたと思う。しかし、このエッセイを書くにあたってこの一年を振り返って見て、私はコロナを言い訳の道具にし過ぎていたと思い、反省している。確かに、コロナのせいでできなかったことはある。体育祭、旅行、部活動の大会などの中止はどうしようもなかった。しかし、時間自体は奪われたわけではない。コロナによって色々と制限はあるが、その限られた中で挑戦できたことはあったはずだ。だが、私はコロナをいい理由に勉強や部活動に精を出さず、何事にも消極的になっていた。このコロナ一色の一年で、私は逆境すら利用できる程の「行動力」が自分には足りていない事に気づいた。そして、これからの一年でその力を身に付けられるよう色々な事に果敢に挑戦していきたいと思った。コロナウイルスが終息したとき、それまでの日々が誇らしかったと胸を張って言えるよう、一日一日を大切に過ごしていきたい。結局はコロナであろうと無かろうと、「今を精一杯生きること」が生きていく上で一番大切なのだろう。